

り、寒風に連れて急雨面を撲つに耐りかれて、一同道具を纏めて旅舎田村屋へ引上げた。

田村屋の廣間には火鉢に火が熾んに起つてゐる、盆の上の煎餅は八方から出る手のために忽ちに消えて仕舞つた、寫して來た繪を修正するもの、知人への繪葉書を描くもの、湯に入るもの、お饒舌するもの、それと、何れも忙しい。

夕飯が済んでから出掛た人もあるが、同行者を調べて見ると四人不足だ、みどり會の人達は平塚から歸つたやうだが、研究所のオー君とアイ君が見えぬ、ドーしたのだらうと心配してゐると八時頃やつて來た、オー君は手に鷗の生きてゐるのを提げて、椽側に突立つて、宿の名を知らなかつた、め大磯平塚の間を三度も歩行いて尋れたといふ、其鳥はドーしたのかと問ふたら、海岸で寫生してゐる時傍へ來たから、三脚を叩き付け手捕にしたのだといふ、兩翼を擴げて見たら四尺餘もある、大した獲物で、オー君にとつては恐らく今日の寫生畫より此方が値打があるであらう。

人も揃つたので、寄附金で虎子饅頭や密柑を澤山買つて遊びを始めた、カルタは一向振はなかつたが、アンマさんは大當りで、奇想天外より墮つる的の隠し藝も出た、例の吊し喰もやつた、かくて夜も更けたので、一同明日の寫生の成功を祈りつゝ臥床に入つた。

明くれば二十二日、一點の雲もなき好天氣で、朝の三時頃より起きて騒いでゐる者もある、東も白まぬうちから寫生箱を肩に

して飛出す連中もある、七時頃には皆一二枚の獲物をして歸つて來た、そして饑虎的體度で朝飯をすませ、大々の握飯の包み一つ宛腰にして、是からは銘々自由行動をとる事として爰に一先寫生會を解散した。

*

*

*

*

予等一行九人、富士を寫さんとて千疊敷に向ふ、登路峻しくエス老人大に艱む、山上にはさきに別れし五六の所員ありて頻りに筆を揮つてゐる、今朝は富士も鮮やかで、海も平で、眺望極めて佳なりである。十一時下山、エス老人は茅ヶ崎へ、予等は約あれば停車場へ向ひ、藤澤より江の島、こゝに見物をすませ、夫より鎌倉長谷に三條家別邸を訪ひ、公爵並びに夫人の懇篤なる待遇に、合作やら繪葉書やら時をも忘れて樂しみに耽り、漸く九時の汽車に乗つて夜半無事歸京した。一行の間に起つた滑稽な出來事は、別欄に各々出品してあれば就て見られよ、但こゝに載せざるものは極々つきの内所事と知り給へ。(完)

ないしょく

眞先に出了したのはテー、エーと申もの、時は朝の五時大急ぎで研究所へ出掛けたら、奥の方に脊の高い洋服着た人が居るので、テツキリ大下先生と思ひ込んで謹んでおジャをした、すると、皆んなが笑ふのでよく見たら何のこつた同窓のエー、エム君だつた。エー、エム君は随分澤山出品がある、大磯でエス、

エム君の帽子を冠つて探させたり、チヨツカイを出して演猫に手を咬まれたり、曰くつきの洋服を他人に見せるのを厭がつて、マントを脱ぐと直ぐ宿屋の貸浴衣を羽折たり、千疊敷では山から飛下りて御得意の腰拔かしをしたり、數へ立てたら際限がない■大船で上等辨當を買つて、散々荷厄介にしてはゐたが、それでも食ふ時を樂しみに我慢して持つて來たのに、イザとなつたら情なや飯は冷たく硬くマヅク、二十五錢捨てたやうなものだとコホしてゐた先生は誰？、寫眞を見るとワカるとき■馬入の鐵橋の下で汽車に小便をカケられたといふてゐた人もある■いざ寫眞といふ時雨がヤケに降つて來た、風がベラボーと寒い、皆々震へ上つて其不景氣なザマといふたらない、『シツカリ爲給へ寫眞に寒い顔が寫つたら罰金だ、モット暖かい顔を爲給へ、』『先生、暖かい顔とはドンなに爲たらよいでせう？■橋の傍の茶屋で辨當を遣つたが、早くから汽車の中で濟ました連中はさも羨ましそうだつた■隠居さんは手がカシカンでナイフを出す事も出来ない■宿屋でマントが紛失したといふて蒼くなつて尋ね廻つてゐたら、下で女中が疊んで仕舞つて置いてくれたのだときいてホット息をしたのはテー、エー君■お菜が足りなくて飯を食つたやうな心持はしないと苦情をいふから、何杯喰つたかときいたら、タツタ六杯だとさ■是ではお菜も足るまいよ■朝は勘定してゐたら九杯喰へたよ、■玉子焼に醬油をウンとかけて泳ぐやうにして大切に食べたが、それでも不足で隣りの香の物を卷上げたのはスサマシイ■モー止める積りだつたに、御給仕

がまだ居たから氣の毒に思つて改めて一杯餘分に食べたと言譯つきのもある■食事中一度運動に起たのは此方だつたね■電燈のホヤを掃除するのは面倒だらうといふ質問も無邪氣だが、呼吸で吹消して見せるとリキンでゐるのは驚いた者だ■アンマサンの時の隠し藝で一番振つたのはエス老入の隠し壘、當年七十二歳、夜中小用に起きる事正に十四度、不得止壘の用意をして來た、大切のものなれば今朝から腰につけて肌身を離さず持つてゐたと、座敷の眞中へ出された時は一同アツといふて二の句が次げなかつた■アカちゃんにナオちゃん湯に入つて二三時間も出て來ない、その筈き一週間分の垢を落すのだといふので東京から石鹼迄用意して來たのだもの■突然クリムゾンレィキの月が出たといふて叫ぶものがある、ナアニエメルドグリンだといふのがある、大磯の月だとてそんなに種々には見えまいに■嬉しいのだから面白いのだから夜の三時前から起きて饒舌り散されたのには閉口した■菓子を買ふ時帽子を持つて廻つて集めたが、五厘しか出さなくて饅頭をウンと食つたと白狀してゐる人もある■五十錢出す振をして一寸見せて其實二錢だけ投込んだといふ横着者もある■エヌ、エム君にいま二發喰つて來たと朝ばらから祝砲を見舞はれた人もある■祝砲はエヌ、エム君の御得意の隠し藝といふことも此時露現した■宿屋の女中がイラク引張つても兩戸が明かない、ヨシキタ己れが手傳つてやると勇ましく出て來たぜツト君、引くべき戸をウン／＼いふて押してゐた、コレではドンナ大力でも明きつこはない■三人

分の寢所を二人で占領して、夜具を三枚かけて寢たものは俺ればかりたろうと威張つてゐた人もゐた。ノノノ僕も三枚かけて寢ましたよ。海岸から犬がついて来て二階へ迄も上るといふ騒ぎ、その犬が居ないといふて椽側へ出て大聲でイヌノと叫んで居た人が居た狗を呼ぶのにイヌノは可笑しい、モシノも變だ、名を知らなくとも斑とか赤とか何とか呼びやうがありそうなものだ。鎌倉行の一行が藤澤で汽車から下りて江の島行の電車へ乗つた、緩々と座席を取つてゐたら跡から盛んに乗つて来る、忽ち満員だが電車は中々出ない、氣の短かい人はベルを引いて催促して居る、随分待たせるがそれでも早く来たために腰かけて居られる丈け仕合せだと、車の出ない不平はあつたが此方で慰めてゐた、スルトやがて電車が一臺着いて、客が下りると車掌が前の車へお乗換を願ひますといふ、形勢一變遅く来て少ししか待たなくて車中に起つてゐた人が座席に着いて、早くから待ちに待つてよい座席を占めて喜んでゐた吾々が立往生、それもワルクすると満員でお次へ願ひますを食ふ處、ア、世は塞翁の馬なる哉。あとできいたらサツキの車は待合所だとさ。江の島の榮螺の小さくなつてそして不味になつたことモロコリノ。三條さんの御邸での合作には弱りましたよ。東京へ歸る迄に屹度何か失策がありますよなんて噂をしたものだから、三條邸を出ると間もなく寫生箱の蓋が明いて、眞暗闇の中へ一切の道具を抛出して仕舞つた。それは誰？ ソレ一番元氣で一番お酒に酔つた人さ。あまり急いだからさ、そんな事言はずに手

傳つて拾つて呉れたまへ。早くしないと汽車の時間に合ないよ。急いた。車室乗合一人もなし正に買切と申次第で誰れに遠慮もないから耐らない、唱歌、詩吟、謠曲、歌ふものは何でもござれ、舞踏も始まる、ハーモニカも始まる、知つてゐる丈けを不殘お洩したのはゼツト通人にエム先生。手を叩いて大に景氣をつけたのは一行全體。此流車は大船で乗換ときいてゐたので急いで飛下りてブリツチにかけつけたが、車内から下りる人が少しもない、變だわいと車掌にきいたら、直行だといふ、ヤー大變と先へ往つた人と呼ばひ集め、再び元の車室へ逆戻りの體、お早く願ひますと驛夫の聲が烈しい、これが最後の失策で夫からは居眠りながら無事に新橋へ着いた、めでたし。

△ △ △

在臺北、石川欽一郎氏の近信によれば同氏は一月下旬同氏一人の自作展覽會を開きしに非常を盛況なりしと、猶引續きて總督府國語學校官舎の一部に研究所を開きしに同好者盛んに集まり來り立錫の餘地もなき程の有様にて何れも非常の熱心を以て墨炭畫より稽古をなしつゝあり、石川氏は隨時出席し、一週一回は特に講話をなして懇篤に授業せられつゝありといふ

* * * *

* * * *